

雄全集Ⅱ

子・その愛
子・その死



新潮社版

檀一雄全集

第二卷

© Yosoko Dan, Printed in Japan, 1977.

印刷 1977年 6 月20日

発行 1977年 6 月25日

著者 檀 一雄 (だんかずお)

発行者 佐藤亮一

発行所 株式会社 新潮社

郵便番号 162

東京都新宿区矢来町71

電話東京 266 - (業務) 5111 (編集) 5411

振替東京 4 - 808

目次

リツ子・その愛

9

リツ子・その死

179

解題

338

檀一雄全集

第二卷

序

詩

佐
藤
春
夫

白昼と杜鵑けん

檀一雄に。「国破れ妻死んで我庭の螢かな」の
破調やぶなかなかに咽なみぶが如く悲しかりければ

たけ高く
秋くさの
きよらにも
にほひしを
あえかにも
人若く
ひとり子を
残し逝く
とこしへに
若くして

夫^せのむねに
生くと死ぬ

国破れ

妻死んで

我庭の

はたる哉

妹^{いも}が死を

つたへたる

友のふみ

よみきたり

まひる野を

音にむせふ

ほととぎす

われは聞く

リ
ツ
子
・
そ
の
愛

「檀さん、洛陽に行きませんか？」

「行きましょう」

「すぐにですよ」

とK社の網野君が二階座敷に坐るなり、心持私の表情を見上げるように、こう云った。

洛陽。行きたいと思った。なにを打棄ててもよいと思つた。東洋の文人にとつて、またとない目出度い聖地に行脚出来る心地である。私は辺りの青葉のひるがえるのを眺めながら、例によつて新しい生涯にすべり落ちる時のめまいに似た不安と、静かに湧きおこってくる陶醉とを味わつた。

微風が絶えず青畳の上をすべっていた。昭和十九年の六月の晴れた日のことである。誕生十ヵ月の長男の太郎が、うず高く積み上げられた本の間に囲まれてキャツキャツと声をあげて笑っていた。風が雑誌の頁をめくるのである。それをおもしろそうに小さい手で押えては風に放つ。可愛

いと思つた。こいつとしばらく離れるのか。たまらないとも思つた。しかし、自分にとつてまたとない大きい転機が来るだろう。神が運んでくれる自然の転機を素直に受入れるに越したことはない。跳ぼう。思いきつて。この俺は、いつも断崖の頂きから飛び降りる名人ではなかったか。

それに——長らく心にかかつていた私の労作についてまたとない恩恵が得られるかも知れなかった。大伴旅人（おほともりつじん）に關してである。上代一流の名家の生涯と、その妹と、二人の子息と、この一族の身近に時々現れてくる鬱屈の老詩人山上憶良（やまのぼろ）は、長いこと私の心について離れなかった題材であつた。愛と死と歌の華麗な奏楽の谷間に、折々洒脱でまた沈痛な老詩人たちのバスの声が混っている。憶良が黄河の畔（ほとり）をめぐつた昔語りを、よまいごとのようにぼそぼそと鋭感の少年に語って聞かせてみたらどうだろう。嘘もある。誠もある。記憶は次第に憶良の肉感で裏づけられたり薄れたりしている。黄河を見はるかした日の戦慄に近い茫漠の実感から、憶良の語調が不意にあやしくふるえてきたりする。とりとめのない昔語りを聞きながら。大陸の相貌を、家持（やかもち）が幼い夢に描いては消す——。

行こう、と私の決心は強まった。黄河を見たら引返す。黄土層に咲き出した梨の花を葉（は）にして、一ひらを老師の手に、一ひらを妻の手に、それから憶良のようにポソポソと支那のお伽話を、わが子の寝物語に聞かせてやれば、それでよい。

「行きますよ、いつでも」

と私の返事はきっぱりした。

「そうですか、ありがたい。あなたほどの適任者はほかにないですから」

とK社の網野君はお世辞とも実感ともつかぬ言葉を口にしながら、折から連れだつて来ていた婦人記者と肯き合うた。「適任者はない」そうだ、私ほどの適任者はない。今、私だけが必ず行つて見なければならぬところだ。私のみを主体とするならば、これほど重大な旅はない。けれども戦いの日に千里に旅立つからにはなにがなし新しい不安の気持も消せないのである。私は厠に立つてみしみしと階段を降りながら、ちやうど茶を上げる妻とすれちがった。

「おい、支那に行くぞ。すぐにだ」

玄関の青葉の照りかえしからか、見上げるリツ子の頬が色を失つたように思われた。茶器をのせた盆を手一二歩よろめくように後ろにすぎる。

「いや、すぐ帰るさ」

耳許に口をよせつつささやいて、自分の手で、よろける妻を壁際のところに静かに支える。麻布を通して手なれた妻のぬくもりが伝うてくる。やがて長身の妻の皮膚が胸から腰の辺りへと波打つようにふるえてきたように思われた。

私は二階に帰つて茶を啜りながら、

「それでいったい、期間はどのくらいになりますか」

「三月ぐらい、どうでしょう?」

「帰れるかな。三月で」

もう東京は第一回の空襲を浴びていた。石神井の自宅の二階から、松の梢の辺りに、見慣れぬ大型機だ、と妻と太郎と三人して翼に描かれた文字まで見えるように眺めたのは、ほかならぬB25だった。B25の来襲の折はなんの恐怖心もなかったが、相手が米国であつてみればあんな生やさしいことですむとは思えなかった。山本元帥が死んでいる。アッツ島からはじまり、クエゼリン、ルオット、サイパンと数えていって、なにか腹の底にひんやりと冷えてくる前途への不安があつた。二三日前も芳賀檀氏の邸に女房と子供を連れていって、芝生の薔薇園に案内され、紅白ビロードのような見事な花々を切りとつてもらつたが、芳賀氏は花を摘み摘み、

「檀さん、サイパンをどう思う」

「さあ、今度は大丈夫でしょう。こちらから近いのですから」

「いや、危い。二十数隻の大型艦がぐるりと島をとり囲んで、こちらからはまったく近寄れないのですよ」

嘘を云う人ではなかった。どこか確かな筋の情報を得ているのだ。背筋を流れるような冷たい不吉が感ぜられた。こんな日に妻子をおいて千里に旅立つとは——と、しきりな逡巡も感じられる。が三月なら大したこともあるまいと考へていつて、また、旅の魅力に抗しがたいのである。

「帰れるかな、三月で?」

もう一度誰にもなくつぶやいてみて、人から、その三カ月の旅の完了を予約してもらいたかった。が、誰も答えてはくれないのである。自分でもなるべく短期間がよいと思つたが、出かけたら、それでは終らぬような予感がある。旅立つたら自分でも抑制出来ないところで、次々と新しい旅程が私を誘引する。きまつてそうだ。未見の風物の幻がたぐりよせる力は執拗だ。

「まあ、半年にはなりますね」

その半年にも自信がない。あぶなくすると一年になりかねないな、と私は思ったが、網野君が云ってくれる三カ月を妻への唯一の保証にした。

「三月だそうだ」

「でも、せっかくいらっしゃるなら、ゆっくりでもよろしいことよ」

上つてきて、茶をさし更えるリツ子が云う。

「大丈夫ですよ。奥さん。今度ばかりは太郎さんに会いたくて、檀さん、すぐに舞い戻りでしょう」

網野君が援兵に出た。けれどもこればかりはあてにならないというふうに、リツ子はちょっと私を見上げ、それから太郎を抱きしめながら降りていった。

急に空虚の気持が増大する。いつのまに、こんなふうの家庭の虜になつたらうか、と自分がいぶかしく、

「行き帰りは、飛行機ですか？」

「さあ、そいつは」

と網野君が当惑している。

「飛行機にしてほしいなあ」

変なところで我を張りたくなつた。雁の巢から、見上げる太郎とリツ子を、一挙におき去りにして翔び発ちたいのである。

それでも雑誌記者が帰つた後は、リツ子はいつになくはしゃいでいる。いろいろと云う。

「ねえ、太郎。ゆっくり安息が出来ますよ」

夫婦だけの可憐な小さい隠語もあった。

「太郎さんと二人で、毎日太郎の御馳走たくさん作りましょうね」

「太郎さん二人つきりで、このお家でお父さまを待ちましょか。それともおばあちゃんまのところにゆく？」

「とにかく、意地悪お父さまがいなくて毎日ねんねよ、せいせいよ、ね、太郎」

さすがに夜はこたえるのだろう。早く床につき、何度もし私の体にすがり寄る。すべすべと柔い肌の温かさを縁どる麻の寝巻の冷やかな手ざわりが、愛撫の瞬間の陶醉を、とめどなく不安なものにする。

「支那の幽霊はね、煙のなかを走るのだよ。塀の蔭にそつて走るのだよ。俺が死んだら、上海あたりまでは堤防の蔭にそつて走ってくるけど、しかし、海は渡れんな。戸惑うね。おまえのところまでは帰つてこれん」

「お船の蔭は？」

「船の蔭か。いや、あんなものに附いて走るのは面倒くさい。東支那海の真中あたりで、離れてしまう。それの方がよっぽど楽さ。キラキラ、サラサラの波の蔭にあつちに浮び、こつちに浮び、ぼんやりと仰向けになって、空を見ながら浮んどこう」

陶酔の果のうつろな眼で、リツ子はあてもなく天井の辺りを見つめていたが、

「いいことよ。ねえ、太郎。意地悪のお父さまなんか、もう知らない。太郎と私は、ねえ、お父さま。ゆらりと三日月さまにまたがります。甘い空気がいっぱいに吸えるのよ。いいでしょう。三日月さまはぶらんこのようにお空のなかをゆれて飛ぶのよ。するとほら」

と甘いいを方言のままに長くひっぱって、くすくす笑いながら、ぐっすり眠っている太郎の頭を一つ撫でると、

「ねえ、太郎。ほら、下の真黒い海の真中に、幽霊のお父さまが浮んでいる。波の蔭でぶるぶるふるえていらっしやる。可哀想、可哀想。ねえ、太郎。あんまりお可哀想だから、ちよーんとひとつ掬ってあげようか。やめようか。お紐でぶら下げてあげようか。でも、意地悪お父さまは、カンドタのようにドブーンとまた海のなかに落してしまおうか」

リツ子は浮かされたように、太郎の顔に頬ずりをしたり、繊い指先で撫でてみたりしながら、とりとめもなく、そんなことを云っていたが、いつのまにか泣いていた。

出発はいつとはっきりわからなかった。しかし今日明日にも軍から通告があるかも知れない、と連絡のK社の網野君が知らせに来た。

同行は土屋文明氏、加藤楸邨氏、上田広氏の四人になりそうだと云っている。出発前に、是非とも一度は佐藤春夫先生のお宅までお別れの言上にまかりでておきたかった。梅雨がなかなか晴れきらぬのである。

旅の服装が整わないとリツ子はしきりに気を揉んでいる。生憎、私は国民服も編上靴も持ち合せがなかった。

「亡くなったお父さまの日露戦争の時の将校服が残っている筈ですし、弟の編上靴を借りていらっしやい。すぐ電報を打ってみましょう」戦争のさなかの旅立ち故に心さわぐのである。あわただしくあちこちに電報した。くわしい書簡は一さい禁じられている。けれどようやく晴れ間をみて、リツ子と太郎を伴って関口台町の佐藤先生のお宅に伺った。紅殻を流しこんだ部厚い漆喰の土塀の上に、相変らず蔦が青かった。門をくぐって、しばらく閑寂の小前庭の風情をよろこぶのである。鉢の水に夏の虫が泳いでいた。藤棚の下蔭が不態に掘りかえされて、形ばかりの堅穴防空壕が急造されてある。ガチャリと扉が開いて、

「まあ、檀さんですよ。令夫人と坊ちゃんと御一緒」「上ったらいいね」

と応接間に坐っておられるのだらう春夫先生の聞き馴れ